# ペルソナ4～迷いの先に光あれ～

四季の夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ペルソナ４～迷いの先に光あれ～

【Ｎコード】
Ｎ２８４２Ｚ

【作者名】
四季の夢

【あらすじ】
影時間やタルタロス等の学園都市での闘いが終わったが一人の少年は眠りについてしまった。そして少年を守れ無かったと学園都市を去る一人の男。
それから二年、舞台は学園都市から一つの田舎町・稲羽市へと移る。
そこで過去を背負い皆を守る為、瀬多洸夜の闘いが始まる

# プロローグ

？「ん？ここは？」

俺は気が付いたら見知らぬ場所にいた。車の中・・・見たいだな。そして椅子の真ん中に要る見覚えのある男と見覚えのない金髪の美女いた。

イ「ヒッヒッヒッ私はイゴールです覚えておりますかな？」

？「あぁ、覚えてるに決まって要るだろ。俺にワイルドの力やペルソナについて教えてくれたのは他でもない、あんただ。」

そうこの男ーーーイゴールは二年前に世話になったんだ。そこでふっと隣を見てみる。

？「あんたは？」

俺は隣の美女に聞いてみる

？「お初にお目にかかります私はマーガレットと言います。以後お見知りおきを」

？「あぁよろしく、ところでエリザベスはどうしたんだ前までは彼女がここに」

イ「エリザベスは現在ここを出ております。ちなみにエリザベスは私の妹でもありますよ」

その言葉に俺は驚く

「妹！？それに出てるって何処に？」

そして今まで沈黙を守っていたイゴールが口を開く。

イ「エリザベスは彼を助ける方法を探すために現実の世界を回っておるのです」

・・・その言葉に俺は目を開く。

？「・・・彼って言うのはやはり。」

俺の言葉に静かに頷くイゴール。

イ「えぇ。貴方と同じワイルドの力を持ち二年前に皆を救う為に眠りについて仕舞ったあの彼です」

「・・・そうか」

その言葉に俺はイゴールから目を背ける。そんな俺にマーガレットが声をかける

マ「そんな顔をしないで下さい、あの子も定期的に連絡を寄越しているので心配なさらずに」

その言葉に俺は

？「いや違うんだ」

マ「えっ？」

？「俺はあいつが、ああなったって知ってどうすればいいか分かんなくてな、卒業式が終わったらすぐにあの街を逃げ出したんだ。」

俺の言葉を静かに聞いてくれるイゴールとマーガレット。

「その事からずっと逃げていた俺に比べて、エリザベスはあれからずっと頑張ってたんだな。」

俺の言葉にイゴールは

イ「あれは仕方ない事だったのです。あれは彼が自分で決めた事、貴方が自分を責める必要はありません」

イゴールの言葉に俺はただ己の情けなさしかなかったそんな時だった。

マ「それで貴方どうするのですか？」

？「えっ？」

マーガレットの言葉につい聞き返す俺。

マ「このまま、何もしないままでいいんですか？」

その言葉に俺は怒りを感じてしまった。

？「うるせぇ！お前に何が分かる！・・・俺は逃げたんだぞ。その過去は消えないんだ」

俺はそう言うと、顔を下げる。

マ「でも、未来は変えれますよ。」

その言葉に俺は顔を上げた

マ「たしかに過去は決して変わりません。ですが未来は変わります。ここまで言えば、分かるでしょ」そう言ってくれたマーガレットの顔は何処か優しかった。

？「・・・そうだな、俺にも何か出来るかも知れないな、だが何をしようか？」

イ「実は今回貴方をお呼びしたのはまさにその事なのです」

その言葉に俺は表情が真面目になる。」

？「何かあるのか？」

イゴールはゆっくりと頷く

？「たが影時間もタルタロスも、もう無いんだぞ。」

イ「いえ、実は今度貴方様が行く町で事件が起きます」

「稲羽市で！？」

イゴールは頷く

確かに俺は両親が海外で仕事をするから、弟が叔父さんの家に行くことになり、ついでにお前も来いと言う事になり近々弟と一緒に稲羽市に行く事になったのである。

？「そこで俺に事件を解決して欲しいと」

イ「はい、それと実は貴方様の弟様にもお願いするつもりです」

イゴールの言葉に俺は驚く

？「総司を!？なぜだ？」

イ「それは、運命だからとしか言えません」

「そんな理由・・・はぁ

そうだったな、あんたはそう言う人だった」

そう言った俺の言葉にイゴールは笑いながら答える。

「ヒッヒッヒッ理解が早くて助かります。」

そうイゴールが言った瞬間俺は視界が揺れた。

「どうやら、現実の貴方が目を覚ますようですな」

「・・・そうかイゴール、マーガレットありがとう」

「いえいえ、私は何も」

そう言ってヒッヒッヒッと笑うイゴール

マ「ふふふ、ではまた会いましょう・・・瀬多洸夜様」

そう笑うマーガレット

洸夜「ああ！またな！」

そうやって笑顔で返す俺
あれ？そういえば俺マーガレットに名前名乗ったけ？そう思いながら、俺は視界が暗くなった。

マ「ふふふ、本当エリザベスの言った通り自分一人で全部背負い込もうとして、それで何処と無く放って置けない人だったわ・・・またね洸夜」

洸夜が消えた場所でそう言うマーガレットの顔は何処か楽しそうだった。

イゴールからの呼び出しから数日がたった。

現在俺は、弟と一緒に稲羽市に向かう電車の中だ。

洸（稲羽市で一体何があるんだ・・・イゴールが俺に頼んだと言う事はペルソナやシャドウ関連か？それともあいつに関係が・・・）

だが、幾らか考えても予測しか立てられない俺は結局ため息しかでなかった。

洸「ハァ・・・（こんな事ならあいつ等にも連絡すればよかったな、でも逃げ出した俺の事なんか相手にしてくれないか・・・だけど、あいつ等元気かな）」

とそんな事を思っていた時だった。

総「はっ！」

寝ていた俺の弟ーーー瀬多総司が突然目を覚ました。

洸「おはよう、起きたか？」

総「・・・兄さん」

洸「なんかあったか？」

イゴールが干渉でもしたかな？あいつ夢の中で出て来るし。

総「いや、大丈夫なんでもない。」

洸「そうか、ならそろそろ降りる準備をしろ。間もなく着くぞ」

総「分かってるよ」

稲羽市が見えて来るのを確認して、そう言うと俺達は荷物をまとめて降りる準備をした。

洸「（さて、あの町で一体何が起こるんだろうな）」

## キャラ紹介（前書き）

キャラ紹介です

## キャラ紹介

瀬多　洸夜
《せた》《こうや》

年齢：二十歳
外見：灰色の長髪、顔は上の下

使用武器：刀（片手剣）ペルソナ白書

ペルソナ：オシリス
能力：ワイルド・多重召喚（二体以上のペルソナ召喚）
趣味：剣術と料理
性格：家族と友達思いであるが一人で全て抱え混んでしまう。また優しさと厳しさを中立した性格で悪い時は自分だろうが他人だろうがキレる。

今作の主人公にしてペルソナ４の主人公の兄。

家から離れ一人で学園都市へ行き『私立月光館学園』の高等部に入学。
趣味でやっているだけあって、剣術はかなりの物。

それから、クラスが同じになった美鶴や明彦と友達になる。

そしてその夜の夢にイゴールが出て来て、色々と説明するがその時の洸夜は意味がわからず相手にしなかったが、次の日の夜に木刀で素振りの練習をしていた時に影時間に巻き込まれ、そして学園の場

所にあったタルタロスに興味本位で侵入しシャドウと遭遇し異変に気付いた美鶴達と合流を果たしシャドウを撃退。（この時にペルソナ能力に覚醒）

そして美鶴達から事情を聞き、『特別課外活動部』に入部する。武器の刀は美鶴から貰った物で世界に一つしかない、ある意味オーダーメードな刀である。

それからは3の主人公達が来た事により、皆のお兄さん的存在になり、ゆかり達からも信頼が厚かった。だが、自分の周りで敵味方なく、人が死に（千鳥は生存）目の前の命を守れ無かった自分を責めていた。

そして、自分達の卒業式が終わった後に3の主人公の状況を知り。何も守れなかった自分に絶望し、3の主人公をどうすればいいかわからず、学園都市から逃げる様に去っていった。
その為、後日談は参加していない。

その後は家に帰りバイトや株又は近所の道場のお手伝いをしながら金を稼いでいた。

それから二年が経ち、イゴールとマーガレットの励ましにより自分にはまだ出来る事がある事を知り、巻き込まれる弟を守る事そしてまだ見ぬ事件解決の為に稲羽市へと向かう。

恋愛面
異性では美鶴との仲が一番良く。互いに意識していたが、互いに一

歩踏み出せず友達以上恋人未満の関係である。

主な使用ペルソナ

オシリス

物火氷風雷闇光

無ーー耐吸吸耐

洸夜が初めて出したペルソナで3の主人公とのコミュで姿が変わっている

姿は赤と白と黒の着物と甲冑を足して二で割った様な服に顔には龍の様な朱い仮面、背中には朱い翼そして右には大剣を持つ

風耐性

物理無効

ジオ系とムド系の技

そして数々物理技を持つ

攻撃型のペルソナ

ムラサキシキブ

物火氷雷風闇光

ー耐吸耐耐吸吸

洸夜がイゴールの下で創ったペルソナ
姿は青の長髪に白と桃色の着物を着て、周りには金色の羽衣があり。
右手に本を持っている女性の姿をしたペルソナ

属性技
補助技
回復技
を多数持っているサポート型のペルソナ

この他にも多数のペルソナを使える。

## 霧の中の夢（前書き）

なんとか投稿です

**霧の中の夢**

洸「ふ～座り過ぎて、尻がいたいな」

電車から降りて、俺が最初に言った言葉。座るのは楽だが、座り過ぎはだめだな

総「これから、どうすんだっけ？」

駅から出て辺りを見回す

総司

洸「叔父さんが迎えに来てくれる筈なんだが・・・」

俺も一緒に見回した時だった。

堂「お～い、こっちだ！」

少し離れた所に叔父さんーーー堂島僚太郎とその娘さんの菜奈子が立っていた。

洸「いたいた！今行くよ」

叔父さんとは随分久しぶりだな。娘さんとは初対面だな。

堂「よ！二人とも写真よりハンサムだな。」

洸「ありがとよ叔父さん、そしてご無沙汰してます」

堂「本当に久しぶりだな。全く少し見ない間にでかくなりやがって」

洸「ならなかったら問題でしょ。」

堂「はは！そりゃそうだ」

なんて世間話をしている。俺と叔父さん。そして挨拶する総司

総「初めまして」

そう言って手を出す総司

「初めましてか・・・オムツを取り替えてやった事も有るんだかな」

そう言って笑いながら握手に応じる堂島

堂「都会と違って退屈かもしれんが・・・」

洸「大丈夫だよ、それよりそろそろ自己紹介したいんだけど」

堂「あぁそうだったな、ほら菜奈子」

そう言って堂島の後ろから顔を出す菜奈子ちゃん

総「初めまして、瀬多総司です」

総司に続いて挨拶する俺

洸「総司の兄の瀬多洸夜だよろしくな菜奈子ちゃん」

俺は出来るだけ笑顔で自己紹介をした。子供が怖がらせちゃ駄目だからな最初が肝心だ。

菜「・・・／／／」

顔を赤くして堂島さんの後ろに隠れる菜奈子ちゃん

・・・なぜだ？顔が怖かったのか？等とショックを受けている俺

総「兄さん・・・いい加減に顔がいいの自覚してよ」

洸「何！いやいや居たって普通だろう！」

モテた試しもないんだぞ？顔がよかったら彼女が何故出来ない！

総「・・・ハァ～」

あれくの果てに、ため息まで吐かれる始末だ。

そんな菜奈子ちゃんを見た堂島さんは

堂「ははは！なんだ？お前照れてんのか？」

菜「／／／／」

バチン！

と思いっ切り堂島の尻を叩く菜奈子ちゃん・・・あれは痛い

あれから現在、俺達は車の中にいる。俺は窓から景色を眺めていた。

菜「お父さん・・・」
そんな中菜奈子ちゃんが堂島さんに話かける。足をもじもじさせながら

洸「（あ～トイレだな）」

堂「ん？トイレか？」

ドス！
そう言うと菜奈子ちゃんに横腹を殴られる堂島さん
そりゃ怒るでしょ。

そして、近くのガソリンスタンドで車を止めて車から降りる俺達

店員「いらっしゃっませ！」

堂「ガソリン満タンで頼む」

店「はい、ありがとうございます！」

堂「ほら早くトイレ行ってこい」

そう言うと菜奈子ちゃんはトイレに走っていく

店「トイレは左ね、左って分かる？お箸持たない方ね」

菜「菜奈子、子供じゃないよ。」

そう言うとトイレに走っていく

店「何処かお出かけで？」

堂「いやコイツ等が今日都会から来たんで迎えに行ってたんだ。ふ～俺も一服してくるか」

そう言うとタバコを吸いに行く堂島

店「へ～君達、都会から来たんだ、ここ田舎だから何にもないっしょ」

洸「確かに何も無いが空気はいいな」

総「確かに」

て言うか仕事しなくて大丈夫か？すると店員が総司に目を向ける

店「それに見た所、君は高校生だよね。高校生ったら部活やバイトぐらいしか無いでしょ？今、内のスタンドバイト募集してんだ。よろしくね」

そう言うと、店員は手を差し出す。遠回しにバイトの勧誘か・・・

総「よろしく」

その手を笑顔で握る総司

店「そっちのお兄さんも」

そう言って俺にも手を差し出す店員。

洸「（断る理由もないし）ああ、よろしく」

そう言って、俺も手を握り返す。

店「！？・・・君」

俺が手を握り反した途端
店員の表情が変わる

洸「？・・・なんだ？」

店「・・・いや！何でもないよ」

店員と喋っていると、菜奈子が戻ってきた。

店「おっと、僕も仕事しないと」

そして、作業に取り掛かる店員、その時

総「ぐっ！」

洸「！？総司どうした？」

菜「具合わるいの？」

突然頭を抑える総司に心配する俺と菜奈子

総「・・・いや、大丈夫
少し立ちくらみがしただけだから」

堂「ん？どうした」

堂島さんも一服から帰ってきた。

菜「調子悪い見たい」

堂「長旅で疲れたんだろ。今日は家に着いたら飯食って早く休んだ方がいいな」

総「・・・すいません」

堂「そう他人行儀になるな短い期間だが、俺達は家族だ」

洸「そうだぞ。お前は少し遠慮しすぎだ」

堂「そう言う事だ。分かったら全員早く車に乗れ行くぞ」

こうして、俺達は堂島宅に向かう。

堂島宅に着いた俺達は現在夕食を取っていた。
スーパーの惣菜とかだが、今日は仕方ないと思うがごみ箱を見て見ると、惣菜のパックのゴミばっかりこれは、育ち盛りの菜奈子ちゃんにはマズイだろう。
後で総司と話し合いだな。
そして、何気なくテレビのニュースを観ていた俺達

ア「今日から明日に掛けて稲羽市は霧が濃くなるでしょう」

総「霧？」

何気なく呟いた総司

堂「ああ、このところずっと霧が出るんだ」

へ～やっぱ温暖化が原因かもね。

ＰｉＰｉＰｉ
すると堂島さんの携帯が鳴る

堂「もしもし・・・ああ分かった今から行く、・・・飲まなくて正解だったな」

そう行ってコートを持って出掛ける準備をする堂島

菜「お仕事？」

堂「ああ、帰りは遅くなりそうだから先に休んどいてくれ。洸夜、総司、戸締まりとか頼むぞ」

総「はい」

洸「了解～」

そう言うと、出掛ける堂島警察だからね忙しいだろ。

菜「・・・」

まずい・・・空気が重いなこう言う時は。

洸「総司、後は頼む。」

総「え！？」

洸「お前は菜奈子ちゃんとは打ち解けて無いだろ。と言う訳でお休み」

俺はそのまま2階の部屋（ちなみに総司の部屋は俺の向かいだ）に待避する後ろで総司がなんか言っているが知らん。
子供は一対一の方が喋り安いんだよ・・・多分。
そして、部屋に着いたら
そのまま布団に入る。

洸「（今日は別に変わった事は無かったが・・・油断は出来ないな明日から少し引き締めないとな）」

そう言って眠りに着く俺

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

洸「何処だここは？」

俺は部屋で眠っていた筈だったが、気付いたら周りが霧で覆われている空間にいた。
右手には影時間の時に使っていた刀そして、ポケットには銃の形をした召喚器
どちらも部屋に置いてる筈だからここに有るわけがないんだが・・・

洸「・・・」

俺は周りを警戒しながら、前にゆっくりと進んで行く

どれくらい歩いただろうか不思議な事にいくら歩いても疲れがない。
そう思いながら進んで行くと目の前にはいつの間にか扉が在った。

洸「・・・行くしかないよな」

俺は自分に言い聞かせ、扉の先に進む。

洸「ここも同じか」

扉の先にも、霧に覆われた空間しか無かった。
・・・その時

？「やぁ良く来ましたね」

洸「！？・・・俺をここに呼んだのはお前か」

俺は霧の向こうにいるまだ見ぬ者に語りかけた。

？「そう、貴方には興味がありましたからね」

洸「そいつは、うれしいね誕生日でも教えてやろうか？」

？「いや、それはいいよ。私が興味有るのは貴方の力の方だからね。
他の者達とは少し違う力を私は見てみたいんですよ」

こいつペルソナ能力について知っているのか。
それに口調からして俺とは初対面じゃないかもな。

洸「なんだったら俺の力、試してやろうか？」

？「ふふふ、貴方では私に触れる事すら出来ないでしょう」

？に見下した風に言われる俺。
ここまで言われたら、引き下がる訳にはいかないな。

洸「後悔すんなよ」

そう言うと俺は、召喚器を取り出し頭に突き付ける

？「そんな物が無くても、貴方は力を使えるでしょ。」

洸「確かに使えるが、せっかくだからこれを使う事にするんだよ」

懐かしいなこの感覚。
それにこれも二年前の思い出の品だからな。
そう思い俺は引き金を引き叫ぶ。

洸「オシリス！ムラサキシキブ！」

すると、朱い仮面を付けた大剣と翼を持つペルソナと周りに羽衣を浮かせて、本を持ち和服を着たペルソナが現れる。

？「・・・二体同時ですか」

流石に少しは驚いた様だなこればっかりは、『あいつ』にも勝ってたし、だが同時召喚はかなり疲れんだよな・・・だから早めに蹴りをつける！

洸「いくぞ！まずは動きを止める！」

『マハラギオン！』

そう言ってムラサキシキブに技を出させながら、俺は？に刀を構えながら走り出す。巨大な炎は周りの霧を飲み込みながら、？を襲う

？「ぬぅぅ・・・」

そしてオシリスで追撃！
オシリスの持つ大剣から斬撃を連続で繰り出す。

『木っ端微塵切り！』

？「ぐっ！」

洸「もらったぁぁぁぁ！」

そして俺は？に刀を抜刀しながら走り、？を切りかかった。・・・
筈だった。

「（・・・手応えがない！？）」

どう言う事だ？確かに切った筈。
等と考えている俺

？「ふふふ、だから言ったでしょう。いくらやっても無駄何ですよ」

洸「少しショックだな・・・！？」

なんだ？突然頭が・・・

？「どうやら、ここまでの様ですね」

その言葉と同時に周りの景色が歪んできた。

？「ではさよなら。貴方の行動を楽しまさせてもらいますよ」

洸「まて！お前は・・・一体・・・」

そう言いながら、俺の意識は途切れた。

ーーーーーーーーーーー

洸「はっ！・・・ここは」

辺りを見回すと、俺は自分の部屋にいた。

そして部屋の角に置いてある二年前から使っていた刀そして机には

召喚器、寝る前と何にも変わってなかった。

洸「ただの夢・・・じゃないよな。・・・イゴール、今回ばかりはかなりヤバそうな気がしてきた」俺の呟きは部屋の中へと消えた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2842z/

---

ペルソナ4〜迷いの先に光あれ〜

2011年12月10日01時48分発行